
レクイエム・フォー・ア・ガール

久里ワタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レクイエム・フォー・ア・ガール

【Nコード】

N4318Q

【作者名】

久里ワタル

【あらすじ】

二週間前、日本の片隅で一人の女子高生が自殺した。でもそんな悲報だって、ニュース番組なんかで二、三日騒がれたりもするが、進展がなかったらすぐにあんなたちの頭から消えていく。だけど、もしその子と少しでも関わったことがあったなら、それは一生あんなの頭に残り、消えてしまうことは決してないだろう。家族ならばなおさらだ。

一人娘に自殺された父親が、おれの前で土下座し、涙ながらにこう訴えた

「頼む、娘の自殺の真相を突き止めてくれ……!」
おれは、彼女の魂が安らぐのを祈るばかりだ。

久里ワタルシリーズ第二弾

(1)

あんたはアダルトDVDって、みる方かい？ のっけから下ネタっぽくなってすまない。でも今回の話には非常にそれが関係してくるんだ。

おれだって人並みにはみるほうだ。女はここ一年間、ずっといいしね。今回のトラブルは、久しぶりに後味の悪い話だったよ。おれの話のあとには、あんたもAVを手取るのをためらうようになるはずだ。多分ね。おれはあの事件以降、一本もみれていない。吐き気がしてくるんだ。

また本題に戻ろう。下は一般的な話だ。

レンタルビデオ屋、隅のアダルトコーナーで、あんたはAVを手取る。そしておれがそうするように、多分あんたもそのパッケージの裏をみて、その内容を少し想像してみる。その妄想内容が自分の趣向と合致すれば、あんたはそれを借りて、そして家に帰って、観る。それは自然なことであって、別に恥ずかしがることもない。

そのジャンルの中にさ、レイプものつてのがあるよな。あんだだけたくさん棚に並んでるんだから、きつとこの国でレイプものの需要はハンパじゃなくあるんだろう。そしてそれと同時に供給も。数えきれないくらい、世間にはこんなものがあふれかえってる。女が嫌がりながらセックスしている様子をみて、興奮する奴がたくさんいるのだ。おれはもともとそんなの好きじゃないけど。

でもさ、よく考えてみてくれよ。あんたがどのくらい女と（もしくは男と）付き合ってきたのかは分からないけど、女ってのは難しい生き物だよな。表の顔、裏の顔、どちらも持っている。天然の女優といってもいい。男よりずっと複雑だ。

だから何が言いたいかっていうと、あんたには分かるのか？ そのAVの女が、本当にレイプされているかどうかなんてさ。

もし、その女が本当にレイプされていて、その様子を下品な男た

ちが下卑^{げび}た笑顔を浮かべながらビデオカメラをまわしていたとして、それでもあんたはそれを観続けることができるか？ 一旦想像してしまったら、おれにはとてもできない。

なあもし、あんたの大切な人が、そんなことをされていたら、どうする？ 女が涙やよだれ、鼻水なんかを垂れ流し、泣き叫んでいるが、それでも男は笑い声をあげながら腰を振っている。なあ、あんたはどうする？ もしおれの大切な人がそんなことをされたなら、おれは何の躊躇もなくそいつを殺してしまうかもしれない。いや、必ず殺すだろう。一億以上もの人間がひしめいているこの国において、たかが一人を痛めつけたところで、その罪の重さといったら、耳垢にも劣るんだ。それが組織、国というものだ。

結論を言おう。今回の話はバッドエンドだ。それは当然のことで、一人の少女が自ら命を断ち、その父親が復讐する話なのだから。ヤツに、社会に、そして、自分に。

だけどあんたたちにはしっかりと見届けてもらいたい。人の死、特に自殺というものが、どれほど周りの人間を傷つけ、そして彼の人生を狂わせるのかを。命の重さを、冗談抜きに考えてほしい。

おれは今日もレクイエムを聴く。彼女たちの魂が、安らぐように……。

(2)

肌に寒さがチリチリとまとわりつく季節になってきた。十一月になつてから急激に気温は落ち込み、街を歩いている人たちはみな身を震わせながら冷たい風を受け流している。おれもその例に漏れず、すでにダウンジャケットまで持ち出しているほどだ。襟元へ首を埋めながら、きらびやかな虹色のライトが照る方へ、夜の街をふらふらと、蛾みたいに光から光へと漂っていく。

特に用事があるわけではない。ただなんとなくこうしてのんびりと散歩するのがおれの趣味なんだ。人間観察、なんて御大層なことをいうつもりはないけれど、けっこう楽しいもんだ。おれは何のけなしにデパートへ入って、突然需要がなくなった夏、秋モノの服を物色してみたり、ここぞとばかりに売り込んでいる冬物をまじまじと眺めたりする。それでもあいかわらず金もないから、よほど安くない限り買わないけどね。

夜の十時をまわった頃になって、本屋に立ち寄る。中卒だけど本は好きなんだ。まあ読むのは小説ばかりだけどね。

そうそう、勘違いしているかもしれないから言っておくけど、おれはそんなに頭が悪いわけじゃない。ただ施設の母さんたちに迷惑をかけ続けるのが嫌だったから高校には行かなかったただけだ。その頃には暇すぎて図書館で毎日のように勉強してたから、まあそこそこ頭はいいほうだと自負してる。他人と比べたことないから分からないけど。

本屋でおれは週刊誌を何気なく手にとってぱらぱらとめくっている。その中で一つの記事が目にとまった。

それは自殺についての記事だった。『増え続ける自殺者！ この国はどこへ向かうのか！』見出しはこんな感じ。長年続く不況のせいかは分からないが、この国での自殺者の数は年々増えていつているらしい。現在では年に四万人以上もの自殺者がでている。おれは

自殺しようなんて思ったことがないから分らないけど、彼らにもさまざまな理由があるんだろう。それは多分借金であったり、仕事の失敗であったり、もしかしたら失恋で命を断つ人もいるかもしれない。おれは惚れっぽいからそっちの心配はなさそうだ。だからかもしれないけど、たまに女と付き合ってもまったく長続きしない。

高齢者の自殺も増えてきているが、おれの瞳にがつんと入り込んできたのは、少年少女の自殺数の増加だった。四万人もの全自殺者のうち、未成年者の自殺数は五千人もいるそうだ。どれくらいかって？ 地方の県の小さな町なら壊滅しているほどだ。

生きていさえすれば、幸も不幸も同じくらい降り掛かってくるはずだ。生きてさえいれば。おれだって恵まれてる生活しているわけじゃないが、それでも毎日必死に生きてるんだ。金も女も甲斐性もなくなっちゃって、くだらないプライドさえ持たなければ生きていける。ホームレスのおっさんたちだって、死のうとする人なんていない。彼ら曰く、この世ですらこんなに怖いのに、あの世なんてもっと怖いに決まってる、だそうだ。いろんな考え方があるよな。

今回の依頼の話をしよう。

おれはその人と、おれの掲示板の前で出会った。ある晴れた寒い日の朝七時、その人は掲示板の前でじっと立ち尽くしていた。おれはその人に目を奪われた。グレーのスーツとネクタイ、白くなった髪、姿勢はそれほど悪くないのに、なぜか覇気がまったく感じられない。かなり痩せていて、みていてとても痛々しかった。思い切ったようにチョークを手取るが、やはりためらってまたそれを手放す。その様子をおれは目を離さずにじっと見つめていた。そんなことを何度か繰り返していたが、やがてその人はその場を立ち去ろうとした。おれは慌てて駆け寄る。

「おれに何か用？」

おれがそう声をかけると、その男性は少しだけ眉を上にした。正面からだとも顔色も悪くて、一瞬おれは癌の人かなにかと思った。なんとなく、非常に老けてみえる。

「君が……？」

おれは縦にうなずいてみせた。しかしその人は大きくため息をつくと、首を横に振った。

「まさか君のような……。やはり、噂は噂か……。なんでもない。すまない……」

男は低い声でそういうと、踵をかえた。

「待ちなよ。そう言われるのは心外だな。何か困ってることがあるんだろ？　話してみてよ。力になれるかもしれない」

ゆつくりと男は振り返り、しかめ面をしながらおれの顔をまじまじと見つめてきた。心外だなんて言ってカッコつけたけど、本当は少しだけ腹が立った。

「しかし君は……いや、ありがとう」

ほんの少しだけ彼は表情を緩めた。注意深くみてないと見逃してしまいうくらい、ほんの少しだけ。

「それで、依頼ってのは？　まあ、やれる範囲なら何でもやるから、とりあえず話してみてくれないか？」

長い沈黙だった。おれにとっては数十分にも感じられたが、やがて唾を飲み込む音がきこえた。

男は少し頭を前へと傾けると、消え入りそうな声で話し始めた。

「私の一人娘が、二週間前に自殺したんだ……」

おれははっとしたように目の前の男を見つめた。眉をひそめる。

「そんなことするなんて、微塵も考えられなかった……。でも、あの日は……」

「ちょ、ちよっと待ってくれ。悪いんだけど、話がみえないな。おれに何をして欲しいんだ？」

おれは思ったままを口にした。いきなり自殺だのなんだの聞かされてもピンとこないし、それに何をして欲しいのか見当もつかない。まさか娘を生き返らせてくれたなんて言うつもりじゃないだろうか。

おれは次の瞬間度肝を抜かされた。おれの二倍以上は生きてるであらう男から、いきなり土下座をされたからだ。

「頼む、娘の自殺の真相を突き止めてくれ……！」

間髪いれずに男は言った。頭のとっぺんの毛が薄くなっているのが分かった。目の前の彼は、この細い体でどれほどの悲しみを自身に打ち込んできたのだろうか。先ほどまでおれのことを疑っていたようなのに、いきなりこんなことをするなんて、よっぽど追いつめられてるのだろう。おれもしゃがみ込んで声をかける。

「とりあえず、顔あげてよ。ちゃんと話を聞くからさ」

男の目は潤んでいた。娘の自殺を思い出したのか、それともワラをも掴む気持ちで会いにきたおれに、何かを感じ取ったのだろうか。それはわからないが、彼は立ち上がり、目元をスーツの袖で拭いた。「よく分からないんだけど、そういう、自殺の原因とかって、警察が調べてくれたりしないの？」

男は再び首を横に振った。

「そうか……。まあ、あいつらにとってみっちゃあ、そんなの調べたって点数かせぎにも何にもならないもんな……」

おれのその言葉に、目の前の男の瞳に怒りの色が宿る。

「今調べています、の一点張りだ。結局何にもしてくれない。学校に問い合わせても、イジメなど問題のある事実はありません、と言うばかりだ。あいつらにとってみれば、数百人、数千人のなかの一人かもしれん。だけど私にとっては一人だけの、特別な存在なんだ……。私は知りたいんだ、なぜ娘が自殺したのかを……！あんたもそれが間違っているというのか……？」

男は次から次へと無限のように涙を流した。おれはこういう年代の人が泣くのを、そのとき初めてみた。胸の奥で、何かが熱を発しながらのたうちまわっているような感覚がした。おれは依頼を受けることに決めた。おれだって大事な人が死んだとしたら、なんとしてもその理由を知りたいときつと思うから。

「分かった。じゃあ、詳しい話をきかせてくれないか？　なんとかしてみせる」

男は涙目のまま、ゆっくりとうなずいた。

おれは、できない約束はしない。
彼と彼女のために、おれは何ができるのだろうか。

直人がみた光景

武田直人が自らの一人娘の死体を発見したのは、朝のことだった。死因は、首つり。現場の状況を見ればだれにでも分かる、自殺だった。壁に取り付けられていた、服を引っ掛けるためのフックに紐を掛け、そこにもたれかかるようにして首を吊っていた。女の子らしい、かわいらしい部屋は、彼女から死後に排出された体液や糞尿などで見るかげもない程に汚されていた。

美しかった顔は無惨なほどに醜く引きつっていて、よほど彼女の顔を見慣れているものでないかぎり、彼女だと断定できる者は少ないだろう。

直人は娘が前日に家に帰ってきたときから不審に思っていた。いつもよりもうんと遅い、十時に帰ってきた娘は、いつも明るく「ただいま」と言うはずなのだが、その日の表情はいつになく暗く、ほとんど何もしゃべらず、ホームセンターの袋を手を下けたまま、二階にある自室へと入って行った。そして少しすると一階へと降りてきて、風呂場に二時間もこもった。いつもは三十分ぐらいしか風呂場にはいないはずなのに、その日はいやに長かった。

これには直人も驚き、ようやく風呂場から出てきた娘に何があったのかを問うたが、娘は俯いたまま、何も言わずに二階の自室へと再び戻って行った。

妻の早苗とも、今日のあいつはおかしいな、と話していたが、「きつと彼氏とか部活とか、何かのことで悩んでるのよ。難しい年頃だし、しばらくそっとしておいてあげましょう」そう妻は笑いながら言った。

そうして、言いようのない不安を心中に抱きながら、直人はゆっくりと眼を閉じた。明日は土曜日だし、学校もない。明日になって聞いてみれば良い、そう思いながら、直人は眠りについた。

次の日の朝、直人は胸騒ぎとともに目が覚めた。一階の寝室で妻

と一緒に寝ていた直人は、目が覚めるとともに、二階の娘の部屋へと向かった。時間はまだ七時だったが、そのようなことはおかまもなく、娘の部屋をノックする。

部屋の中から返事はない。おかしい。娘はいつも朝六時には起きて勉強をしているはずだ。音楽を聴いているからだろうか。

もう一度、今度は強くノックしてみる。しかし返事はない。扉をゆっくりと開けてみる。

思わず直人は息を飲んだ。娘が、自分の愛娘が、壁にもたれかかったまま、ぴくりとも動いていない。そして鼻に伝わる異臭。窓は完全にカーテンがかかっていたため部屋は暗かったが、確かに娘の姿が確認できた。

直人は娘の方へ駆け寄る。首に掛かっている紐を取り外し、首を支えた。そして頭の中ではうすうす分かっていながら、それを意識しないまま、ただただ娘の名前を呼び続けた。

急いで救急車を呼ぶと、直人は娘の顔を見つめる。そこには普段見ていた面影はどこにもなく、どこか別人のような、そんな顔だった。

たまらず直人は嘔吐した。あらゆる体液が、目から鼻から、体中から噴き出してくる。

獣のような叫び声が、体の奥底からわき出してきた。うおーっ、と荒々しく声を張り上げる。そんなことには何の意味もないと知りながら。

なぜだ、なぜ俺の娘が、美和が自殺なんかを。なぜだ、なぜだ、なぜだ??。

考えても考えても、頭の中に答えはでなかった。

ふと、机の上を見ると、娘の携帯電話が開かれたまま置かれていた。女の子らしく、何かのキャラクターのストラップがいくつも付けられている。

直人はそれを手に取った。もしかしたら、美和が何かメッセージを残しているかもしれない。画面が暗かったため、震える手で、直

人は携帯電話のボタンを押してみた。

ぱっと画面が明るくなり、メールの画面が映った。

直人はそこに書いてある文字を読み、そして、絶望した。

(3)

時折口ごもりながら、直人は自分が見た光景を話しきった。おれはその間何も質問を挟まずに静かに聞いていた。頷くこともしなかった。してはならない気がした。

おれが聞いた話、それはおそらく彼の懺悔に近かった。少し手を伸ばせば救えたかもしれない命に、気づくことすらできなかった自分を、ひたすら責めているようにみえた。おれはこんな人にかけるべき言葉を知らない。二十年生きてきても社会は教えてくれなかったし、そもそも知ろうすら考えたことがなかった。

話し終えて疲れたのか、直人は大きなため息をついた。勢いよく飛びだしてきた吐息の粒たちは、突然行き場を失ったかのように、ふわふわと舞いながら消えていった。

おれ少し頭をかくと、声をかける。

「一番重要なことを訊いておきたい」

直人は虚ろな眼をおれに向ける。

「例えば、娘さんが誰かのせいで、理不尽に自殺に追い込まれたとして、さらにおれがその犯人を捕まえたとする。その犯人を、あんたはどうするつもりなんだ？」

おれがそういった瞬間、直人の瞳の奥には何かが宿った。それは怒りとか憎しみとか、そんなチャチな感情ではなかった。負、その言葉がその字のまま当てはまる。おれは指の先からジーンとしびれが走ってくるのを感じた。そのまま総毛立ち、慌てて視線をよそへと逃がしてやった。もう少し目を合わせ続けていたら、おれが殺されるような気がしたから。

直人は脚の間で手を組むと首を傾け、再びささやくように話し始めた。

「……わたしはもともと、罪というものはある程度寛大に受け入れられるものだと思っていた。テレビでたまに報道されている、殺人

などといった凶悪な犯罪は、テレビの中の――自分が住んでいる世界とは違う場所で起こっているのだと思っていたからだ。だが現実には死というものを目の前にすればどうだ？ ……娘を死に追い込んでもわたしと同じ空気を吸いながらのうのと生きているのかもしれない……。もしそうだとしたら、わたしはそれを、決して許すつもりはない……。そいつが目の前にいたのなら、どんなことがあったとしても、そいつを……」

おれは彼の横顔しか見えなかったが、その言葉が本気だというのが充分過ぎるほど、体で理解できた。その辺のチンピラやヤンキーが大安売りしている『殺す』なんかとは重みがまったく違う。コトが起きるまでしか考えていない、覚悟がある言葉だった。

「もしあんたがそういう気なら、おれはあんたの依頼を受けることはできない。あんたを殺人者にするわけにはいかないからな」

「ならどうすればいいんだ？」

「もし犯人がいたら、おれはそいつを必ずあんたの前に突き出してやる。だが、そいつの処分はおれに任せてくれないか？ おそらくあんた一人じゃこの事件は追えないし、犯人を捕まえることもできない。おれならある程度裏の知り合いもいるし、もし娘さんが何か事件に関わっていたとしても、おれなら追えるはずだ」

「……娘は決して自殺を考えるような子じゃなかった。……あの子は、いつも笑っていた。あの日も、笑って出て行ったんだ。いつもの制服、いつもの時間、いつもの笑顔で……」

直人はポケットに手を差し込んだ。

「娘の遺書は、携帯のメールに打ち込んであった。『もう生きていけない。お父さん、お母さん、ごめんなさい。』そう書かれていた。冷たかったよ……」

直人の眼は再び潤んできた。

「その携帯、まだ持ってるかい？」

「……ああもちろん。だが一回画面を閉じてしまって、メールの画面は開けなくなっちゃったんだ。暗証番号が必要みたいで……」

だから何もみることにはできない。それに……」

「それに？」

「なんだか、みたくないんだ。みてはいけないような気がする。娘に、もういないはずの娘に責められてしまうような気がしてね……」
「まあそこまでしてるってことは何かみられたくなかったものがあったのかもしれない……。もし捜査に行き詰まったらその携帯を貸してくれないか？」

直人はおれを一瞥すると、ゆっくりと頷いた。

「さて……と、じゃあ明後日からとりかかることにするよ」

その後少し直人と話してから、おれたちは別れた。

彼の小さな背中を見送った後も、おれはベンチに座り続けた。腕を組んだまま眼を閉じて、ゆっくりと昔を思い出していたんだ。

少しだけ、昔の話をしよう。

おれには五つ年上のアニキがいた。もちろん、おれは孤児院育ちなわけだから、本当に血がつながっている兄弟なんかじゃない。だから兄貴じゃなくて、アニキ。まあ古い言い方をすれば兄貴分わけだ。

アニキは一言で言えば、凄かった。頭がよくて、ケンカも強い、言ってみれば無敵だった。アニキは自分で企業を始めて、順調に軌道にのっていた。おれはアニキのことが好きだった。困っているときにはいつも助けてくれたし、今の状態に落ち着いているのも、すべてアニキのおかげだ。そして決定的なことに、おれはアニキに命を救われた。これは比喻なんかじゃない。マジだ。そしてそのせいでアニキは、死んだ。いまではもう、おれの方が年上になろうとしている。明日はアニキの命日だ。

さっきも言ったがおれはアニキのおかげで今ここで生きている。おれはアニキの命を喰った。だからおれはどんなことがあっても死にたいなんて思わないし、死んでもいいなんてコンマ一秒すら考え

ない。最近の教育で教えてるかどうかわからないが、命つてのは当然一つしかない。おれの鞆丸よりも少ないことになる。そんな大切なものをみすみす捨てる奴、命を粗末にする奴をおれは軽蔑する。

おれは、アニキが死んだ日を思い出しながら、しだいに暗くなつていく街を見つめていた。

身震いするほど風が冷たかったのは、雪がちらついていたからだろうか。

(4)

直人と会った二日後、おれは彼の娘について調べ始めた。最初に訪れたのは、彼女が通っていた高校だ。私立星野高校。全国でもトップクラスの進学校で、現在国を動かしている多くの人物がこの高校出身だ。校舎は真っ白でピカピカ。ホワイトハウス並みだ。おれは直人から父兄用のIDカードを貸してもらっていたから入れたが、普通の人間なら校門をくぐることはできない。良いところの坊ちゃんやお嬢様が通う学校だから、セキュリティもバッチリで、IDカードを機械に通さなければ入れない。いわゆる要塞だ。どこからそんな金が出てくるかって？ そりゃ、おれたちから搾り取ってる税金を湯水のごとくつぎ込みまくってるわけだから、こんなのを設置するのもワケないさ。

幸い、私服で登校する学校だから、おれもさほど目立ってはいないようだ。じろじろみられることもなく校舎の中に入っていく。まだ高校生にみえないこともないらしい。

校舎の中も外観同様真っ白で、壁から廊下からほとんどすべて白で統一されていて、おれはかなり落ち着かない。床にはホコリ一つおちちやいないし、壁にラクガキなんかもみられない。ここの生徒は意味のないことはしないらしい。イライラして壁を蹴ったりすることもないのだろう。だが、人生なんて意味のないものだらけで構成されている。それでどう遊ぶかに頭を悩ませるのが楽しいと思うんだけど、価値観の違いってモノだろうか。金持ちの心理はよく分からない。

直人の娘、美和が通っていたクラスは三ーC。おれはそこを目指してずんずんと進んでいく。

すれ違う奴らをみていて、おれはどこか違和感を感じていた。うまく言えないけど、彼らの表情は、面白くない。人間味がなかった方が正しいかもしれない。みな同級生らしき者と親しげに笑い

ながら話しているが、おれは彼らの顔に人間らしさをみることはできなかった。別におれが貧乏だったから卑屈になっているわけじゃない。まあ、その可能性がまったくないわけでもないが、街を歩いていて見かける人たちにみられる『光』のようなものが、彼らからは感じられなかった。他の人に興味が無いような、そんな姿だったのが、ただただ印象に残る。生き方の違いだろうか。

やっと三ーCの教室の前にたどり着き、おれは教室のドアを開けて中に入る。

中には静寂がいた。

ほとんどの生徒は自分の席に着席し、異民族であるはずのおれには眼もくれずに、教科書のようなものか何かをみながらノートにカリカリとかき込んでいる。

その中で一番手前にいた男に、おれは話しかける。

「なあ、安斉ヒカリって子はどの子？」

そいつは面倒くさそうにおれをみた後、一人の少女を指差した。

おれはその子につかつかと歩み寄ると、話しかけた。

「なあ、あんたが安斉ヒカリさん？　ちょっと話があるんだけど……」

その子は少し不思議そうな表情を浮かべた後、口を開いた。

「えっと、あなた……だれ？」

いちいち自己紹介なんかをするのも面倒だったので、おれはこの言葉だけを耳元でささやいた。

「この前自殺した武田美和って子について聞きたい」

その子はハッとした表情を浮かべると、いきなり席を立てて教室を出て行った。おれもそれについていく。

ついて行った先は、この学校の屋上だった。校舎の中は気持ちが悪いが、吹く風はやはり気持ちいい。

「それで、あんたは誰で、何を訊きたいっていうの？」

ヒカリは茶色の長髪を風にすべらせながら、おれに尋ねた。

「おれは久里ワタル。あの子の親父さんに頼まれて、美和の自殺の

動機について調べてる。あんたが一番あの子と仲が良かったんだろ？ 何か知っていることがあるなら教えてくれないか？」

ヒカりは大きくため息をつく、やれやれといった様子で人形のように笑った。

「私があの子と？ まあそれなりに話していたから、悪いわけじゃないけど、特別仲が良かったとも言えないわ。そもそもね、この学校で友達を作る子なんてほとんどいない。皆この学校に無理矢理入れられて、『エラく』なるために必死に勉強させられる。ここはそういう場所なのよ。オトモダチなんて作ってる暇はないの。あるとすれば、そうね……、もうすでに決められたレールを走っている人だけよ」

「例えば、イジメなんてことはないのか？」

ヒカりは高く笑った後、ひきつった笑顔のままおれを見据える。

「あなた何も分かってないのね。ここは『エラく』なるためのステップにしか過ぎないの。他の人に興味がある人なんていない。イジメなんて無駄なことは誰もしないのよ。つまり、美和の自殺の真相は、家族にさえ分からないなら誰もわからない。これが答えよ。わかった？ 分かったならさっさと帰って。私も暇じゃないの。勉強してTO大やKYO大に入らなければ勘当されちゃうから……」

おれは二、三秒ほど考えた後、再び口を開く。

「じゃあ質問を変えるよ。あんたからみて、美和はどんな子だったんだ？ その……」

「自殺しそうだったかってこと？」

おれは首を縦に振る。

「少なくとも、この学校においては異質な子だったわ。よく笑う子だった……。将来のビジョンがしっかりあって、そうそう、確か医者になりたいって言ってた。親がフツウの家庭なのも、この学校では変わってるわね。わたしのクラスはあの子以外の親は、ほとんどが医者、弁護士、政治家……そういった勝ち組だから……」

「あんたのところも？」

ヒカリはフン、と鼻をならした。

「お金もうけにしか興味が無い、腐った政治屋よ……。わたしに後継がせたくてしょうがないみたいね……。まあオモテ上は、わたしが一人娘みたいだから助かったけど、ヘタをすれば寝技に使われてたかもね……」

そういつてうつむくヒカリをみていたら、おれの口から勝手に言葉が飛び出していった。

「この学校のやつはよ、眼が死んでるよ、あんたもな……。こんなこと言う資格がおれにあるかはわからないけど、言わせてもらう」
ヒカリは睨みつけるようにおれに視線を刺してくる。

「あんた、それでいいのか？　まだ十七、八だよ……。これでいいのか、って思ったこと、あるのか？」

「あんたに何がわかんよ！　なんの苦勞もしたことないような顔して！　ヘラヘラ笑ってられるようなあんたとは、わたしは違うのよ！」

その激しい剣幕と声に、やっとおれは彼女の本音がみえた気がした。

「たしかにおれとは違うな。あんたは……。窮屈そうにしてる」

ヘラヘラ笑ってる、それはそうかもしれない。なぜおれが笑ってられるか。ヘラヘラだろうがなんだろうが、笑ってられるのはワケがある。おれが自由だからだ。だが、この目の前の少女は違う。生まれた時から……。いや、ヘタをすれば生まれる前からがんじがらめになっているのだ。みえない鎖に。

「ま、おれには関係ないからどうでもいいけどよ……。それで、話を戻させてもらう。美和のこと、もっと教えてくれ？」

目の前の少女はおれを睨みつけながら黙り続けていた。どうやら機嫌を損ねてしまったようだ。まあ、それも仕方ないかもしれない。おれは口からポンポンと思ったことがでてしまうようだから。

「あんた、なんかやりたいこととか、欲しいものとか、ないのか？　おれがその願いを叶えることができたなら、あの子のことを話して

くれるってのは、どうだ？」

ヒカリはふっと口元をゆるめる。

「アンタ、わたしを口説いてるの？　しかも、このタイミングで？　おれも口に出して少し戸惑ってしまった。頭のどこかがむずがゆくなる。」

「やっぱりそう聞こえる？　ま、そうじゃないわけでもないかな……。で、どう？　……。でも、あんたくらいの人ができないことや手に入らないものなんて、ないかもしれないけどな」

返ってきた答えは、意外なものだった。

「じゃ、今日一日、わたしのお願いきいてくれる？」

初めてみた彼女が魅せた笑顔は、これまでとは違う、『光り』に満ちた顔だった。おれはその顔を心底、美しいと思った。雑誌なんかに乗ってるグラビアなんかの、つくりものの笑顔なんてメじゃない。

「おーし、では最初の願いはなんでございましょう？」

腕を組んで考えるポーズをとったあと、ヒカリはいった。

「じゃあ……。アンタ、じゃなくて、ヒカリって呼んでくださる……。？」

そういつてヒカリは眼を細めて小さく笑った。

彼女の瞳が潤んでいたようにみえたのは、おれの見間違いじゃなかったはずだ。

海から際限なく吹いてくる夜風になびく長い髪を、ヒカリはゆっくりとかき上げた。おれはただそれを見つめていた。

デステイニールランド。それが今いる場所。ヒカリの希望により、おれたちはこの日本最大のテーマパークで力一杯遊びきった。そして今、テーマパークのはずれにある公園で、ゆっくりと海を眺めている。黒く恐ろしいはずの海は、なぜか魅力的でもあった。

「久しぶりだなあ、ここに来るのも」

ベンチに座るおれの方を振り向くと、ヒカリはそういつて白い歯をみせた。

「それってどれくらい？」

ヒカリはゆっくりと歩くと、おれの横にちよこつと座った。はずれにあるだけの小さい公園だから、おれたちの他にほとんど人はいない。おれたちの声は大きすぎるように聞こえていた。

「たしか……八歳のときに一度だけ来た気がする」

ふーん、と言だけ呟くと、おれは再び海の方を見つめた。いつ切り出そうか、タイミングを計っていた。いくらヒカリが可愛いからって、当初の目的を忘れるほど馬鹿じゃない。

「でも本当に楽しかったな。まさかワタルが高所恐怖症なんて似合わないすぎて笑っちゃったよ」

ヒカリがそういつてけらけらと笑う。

そうして一瞬の沈黙が流れた。

「なあヒカリ……」

「分かってるよ。わかっている……。少しだけ、少しの間だけでも自由になりたかったただだから……」

おれの言葉を、ヒカリは弱々しい声で断ち切った。そしてヒカリは大きく息を吐く。

「うちの学校、おかしいでしょ？」

おれは何も言わずに頷いた。

「学校の中がなんて呼ばれてるか知ってる……わけないよね。……ノールール、って言われてるの」

「ノールール？」

「うん。うちの学校の中はね、前に言ったみたいに、この日本のトップにいる人たちの子供が入ってくる。その子供も、入学の時点で権力を持っているってわけ。ほら、取り入ってれば、先々で役に立つって、そう思う人もたくさんいるのよ」

おれにはまだ言っている意味が分からなかった。それが美和の自殺と、どのような関係があるのかが、まるでわからなかった。

「それが、なんで美和の自殺と関係があるんだ？」

「この日本で一番強い人って、わかる？」

「なんだそれ？ なぞなぞか？」

「違う違う。そのままの意味。この法治国家で一番強い人」

一度首をひねると、おれは思いついたまま答えを出す。

「例えば……警察？」

ヒカリはこちらをちらっとみると、海の方へと視線を歩かせた。

「当たり前。たまにさあ、政治家とかの汚職がバレたりするじゃない？ あれって大半が、警察を敵に回しちゃったからなの。もしくは警察が味方にいる人を敵にしちゃったとか。まあほとんどの政治家が裏でイロイロしてるけどさ、それがバレちゃうのは、そういう理由があるの」

ヒカリは大きく息を吸うと、また続ける。

「仮にやってなくても、警察がやったって言っちゃえば、事実がどうであれ、本当になっちゃう。そしてその人は、……終わり。彼らは事件を作れるんだもの。そしてその警察のトップは……わかるよね？」

「警視、総監？ ……まさかそいつの子供が、あの学校にいるのか？」

ヒカリは海の方へ顔を向けながら、小さく頷いた。しかしそれを

聞いてもまだ、真相はわからない。

「次男なんだけどね。長男の方は優秀で、いずれ警察のトップになるって言われてる。でも次男、カズヤの方は……」

ヒカリは顔をしかめると、首を横に振った。

「最低なやつよ……。あらゆる犯罪を犯したとしても、彼だけはすべて許される。忘れられる。なかったことになるから……。アイツを守っているのは、法律そのものと言ってもいいのかもしれない。アイツを裁くことは誰にもできないから……」

「そいつが、美和と付き合ってたのか？」

ヒカリは、ふふっと口元を緩めた。おれをあざ笑っているような笑い方だった。

「付き合う必要なんてないわよ。アイツはすべて許されてる。男と女が付き合うのはなぜ？ 結局はその相手とセックスがしたいからでしょ？ でもアイツにそんな手順は必要ない……」

まさか、とおれは思った。そんなことが、この国で許されるのだろうか。

「美和は変わった子だった……。可愛くて、よく笑って……。でも、それがいけなかったのよ……。あの子には、何の後ろ盾もないし……」

「知ってたのか？」

もちろん、というように、ヒカリは大きく頷く。

「そんなことが、この国であっていいのか……？」

「良いわけではないわ。でも、実際には存在してる」

ヒカリはベンチから立ち上がると、腕を伸ばして伸びをした。

「もう、いいでしょ。アイツは法律では裁けない。美和を、あの子を『殺した』犯人が分かったところで、どうしようもないのよ。それともワタル、アイツを、殺してみる？ 少なくとも、百人単位の子のお札を言われるかもしれないわよ？ あとで必ず殺されるでしょうけどね……。明日なら多分、ルーンっていうパチンコ屋に一日中いるはずよ」

ヒカリはおれに別れを言った後、つかつかと歩いて去っていった。
また会おうね、という言葉を残して。

おれはその後ベンチに座り続けていた。
いったいどうすればいいのか、考えても考えても、答えはでなかった。

でもこういう時の手っ取り早い解決策をおれは知ってる。

頭より、脚を使うことだ。おれは問題のカズやってやつに会ってみることに決めた。他人から得た情報だけだと、時には間違いが起こる。でも、本当にヒカリが言った通りのやつだったら、おれは……。

(6)

次の日、おれはパチンコ屋に向かった。ヒカリに言われた通りの店に。

頭は自分でも驚くほどすっきりしていた。ぐっすり眠ったのもあるだろうが、何より手がかりというか、何をすべきかを迷う必要はなくなったのだから。軽い足取りで、まだ人の少ないであろう店内へと足を踏み入れる。というか、水曜日の昼間にこんなところにいる高校生が許されること自体、間違っていると思うけど。

店に入ると、とたんに挨拶代わりのタバコの煙がおれの鼻を刺激する。友達にもタバコを吸うやつがいるが、おれはこの匂いはどうしても好きになれない。「コミュニケーションのツールだよ」という友人もいたが、金払ってまでコミュニケーションをとるのはキャバクラだけで充分だと思う。まあ考えは人それぞれだけど、金を使って健康を害する真似をするなんて、ドMとは思えない所行だ。

止めどなく流れ込んでくるタバコの匂いと、耳をふさいでも否応無しになだれ込んでくるパチンコ台やスロット台の音、本当に好きじゃなければ、ただの不快な音にしかすぎない。金ももったいないというのもあるけど、だからおれはパチンコとかをやらないんだ。

ブラブラと通路をうろつき、出そうな台を探すフリをしながら、おれはあの男を捜した。聞けばまだ十七歳だそうだから、パツとみればすぐに見つかるはずだ。店内は平日の、しかもまだ午前ということもあって、まだほとんど人がいなかった。そしてキヨロキヨロと探しまわっているうちに、おれは一人の青年を見つけた。間違いない、やつがカズヤだ。

茶髪頭でタバコをふかしてはしてはいるが、店内をみたところ、やつしか十代ではありえなかった。青のジーンズに黒のジャケットを羽織っている。顔は、横顔しかみえないが、なかなか整った顔立ちをしている。何もしなくても女は寄ってきそうだ。

おれはカズヤの真後ろの席に座ると、五千円を使ってパチンコを打ち始めた。しかし、三十分もすると飲まれた。

「マジかよー！」

おれは後ろのカズヤにも聞こえるような声で大きく呟くと、台の端をバンツと叩く。カズヤがおれの方をみるのが気配でわかった。それからおれは後ろを振り向く、カズヤの席の横には、パチンコの玉が千両箱に詰められて嫌というほど積んであった。すぐに店員を呼ばないところを見ると、コイツは面倒くさがるタイプなのか、それとも自分が出した玉を見せびらかすプライドの高い（悪い意味で）男なのだろう。おれはそれを見た後、思い切って話しかけることにした。

「いやあ、出てますねー」

最初は敬語が良い。こういうやつには下手に出る方が、上手くとりいれるはずだ。

カズヤは自分に言われているのがわかったのか、おれの方を向き、足下からじっくりとみたあと、呟くようにいった。

「まあね」

手応えは上々。

「あ、おれワタルっていいいます。メツチャ勝ってますよね？ てかおれ、パチンコでほとんど勝ったことないんですよ。よかったら、こういう台を選べば良いとか、教えてもらえませんか？ おねがいします」

おれは真剣なまなざしと、柔らかい笑みの中間の顔をつくる。

「いいよ、教えてやる。おれはカズマっていうんだ。よろしく」

カズヤはにっこりと笑うと、そこからおれにいろんな話をレクチャーしてくれた。良い台の選び方、時間帯、日にちや曜日、それらをおれはときおり頷きながら、真剣に聞いていた。

それからカズヤに台を選んでもらって打つと、玉が止まらなかった。あっという間に台は五、六万円分の玉を吐き出した。

「いやあ、さすがですね、カズヤさん。本当にありがとうございます」

おれはお礼がしたいからと、カズヤと喫茶店へと入っていった。満面の笑みでお礼をいうおれに、カズマは得意げな笑みをみせる。

「いや、あの店は楽なほうだよ。そういえばさ、ワタルって何やってんの？」

おれはある程度答えを用意していたから、困ることはなかった。

「いやあの、大したことない末端のチンピラですよ。カズヤさんは？ 大学生？」

へえ、とカズヤは言ってみせる。興味を持ってくれたのかどうかは、おれにはわからなかった。

「学生だよ。てか一応ヤクザなんだ。へー……。それなら俺に声かけたのはラッキーかもね」

「どういうことですか？」

「俺の親父ケイサツなんだよねえ。しかもかなり偉い方」

そしてカズヤはまたニツと笑った。

「マジすか？ うわあ、すっぱえなあ！」

おれはオーバーに驚いてみせる。その表情にまたカズヤは笑顔を強める。

「だからさ、まあ何かあったら俺に言ってくればなんとかできるかもよ」

「すっぱえなあカズヤさんは。おれ、尊敬しちゃいますよ」

カズヤがタバコをくわえる。おれはポケットからライターを取り出すと、そのタバコに火をつけた。これはタバコを吸わなくても使える技術だから覚えておいた方がいい。「サンキュ」と短くいうと、カズヤは白い煙を思い切り吐き出す。

「よくあの店には行くんですか？」

おれをちらりとみると、カズヤはもったいつけた後に、軽くいう。「一週間に一回行くか行かないかぐらいかな。ワタルは？」

「おれは、月に一回ぐらいですかね。でも毎回負けるんですよ。今

日はカズヤさんと会えてマジでラッキーでしたよ。毎回負けるもんだからいつも金もなくて……」

少し上から目線を送ってくる感じがして、おれはカズマの方をみた。

「おれは金なんて困ったことないけどね」

「へえ、羨ましいなあ。なんでですか？」

うーん、と言いうと、そのままカズヤは押し黙った。出会ったばかりのおれに言うかどうかを迷っているようだ。

「聞きたいですけど、言いたくないならいいですよ。おれたちまだ会ったばかりだし」

おれの言葉に、とカズヤは軽く頷いた。そして続ける。

「そうだな、もう少し仲良くなったら教えてやるよ」

「うわー、楽しみだなあ。そういえば、明日またあの店に行きませんか？ おれはまだまだ教えてもらいたいことあるんですけど」

いいよ、とカズヤは爽やかに笑っていった。少し話をしただけが、今のところカズヤはフツウの高校生となら変わらないような気がする。本当にヒカリの言っていたような男なのか、少しだけおれの中に疑問が生まれた。

「わりい、じゃあ俺用事あるから行くわ。今日はワタルのおごりな」
そういつて、おれに向けて片手をあげると、カズヤは席を立てて店をでていった。

おれも三十分くらいした後、店を出る。まだ夕方になったばかりだが、もう身震いするほど寒い。

電車やバスを使うのがもったいなかったので歩いて帰っていると、そのうち辺りが闇に包まれていった。街にはぼつぼつとカップルや会社帰りのサラリーマンなんか姿をみせはじめ、皆どこか忙しそうに夜風を受けながら歩いている。おれは思いついたように携帯を抜くと、直人の家に電話をかけた。直人は最近携帯電話をなくしてしまっただけで、おれに家の番号を教えてくれた。幸い、仕事用の携帯はあるが、そちらは本当に仕事だけにしたいらしい。呼び出し

音が二回鳴り、ガチャっという音がする。

「あ、ワタルだけど、直人さん？」

「ああ、ワタル君か。何かわかったのか？」

直人の声はあれからまだ細くなったような印象を受ける。

「まあ、少しは。多分、娘さんの死と繋がってる奴は見つけることができた。明日からはまたそいつについて調べることにするから。また連絡するよ」

「ありがとう。良い報せを待ってるよ」

その声を聞き、おれは電話を切った。

直人は気づいているのだろうか。自分の言葉の矛盾に。

おれはダウンジャケットに首をうずめると、家までの暗い夜道を歩き出した。

「カズヤさんはギャンブルって興味あります？」

その日のパチンコも終わって、再び喫茶店で話している最中に、おれはそう言い放った。

とたんにカズヤは目を輝かせる。

「もしかして、そういう違法なところ？　ワタルってそういうところ知ってんの？」

おれは少しの間を開けてから、こくりとうなずく。

「まあ一応、おれもヤクザの端くれですからね。で、もし良かったら、今からおれが案内しますよ？」

カズヤは深く頷いた。

「マジ？　正直行ってみたいな。案内してくれんの？」

おれは素早く携帯をポケットから抜くと、知り合いのヤクザに電話をかける。

「あ、もしもし、ワタルですけど……」

「おお、ワタルか！　どうした？」

陽気な声が返ってくる。二十七歳にして若頭補佐まで登り詰めた、大橋組の三島という人だ。あまり規模の大きくない違法カジノの管理を任されている、（ヤクザの中でそういう言い方をするかはわからないが）期待のホープだ。

「お久しぶりです。今日三島さんの店に行きたいんですけど、大丈夫ですか？」

三島は電話の向こうでクックと小さく笑い声を出す。

「お前がウチに来たいなんて、珍しいな。どうだ、ウチの組に入る決心がついたのか？」

「いや、今日は客として行かせてもらいたいんです。あと、おれの知り合いも、一人……」

「そうか、残念だな。……まあいい。いつでも来ていいぞ。今日は

客も少ないからな」

おれは携帯を切ったあと、カズヤを連れて三島の元へ向かった。

三島の店は、津島駅という駅から徒歩で十五分のところにある。その辺りはまだ普通に都会で、高層マンションは立ち並んでいるし、近くには巨大なショッピングモールだってある。そんなところによく店なんて出すなどおれは思うが、彼に言わせれば、「いろいろと都合が良いから」だそう。その都合については何となく察しがつくが、おれがそれを口に出すつもりはない。興味が無いしね。

一見なんの変哲もない居酒屋、そこに彼の店は存在する。

カズヤは不満げな目をおれに向けながら跡をついてくるが、おれが合言葉を言って居酒屋の奥に案内された後は、感嘆のため息をついた。

それは階段を下りた地下にあった。頑丈そうな扉の前には、屈強なヤクザが二人、不審な人物や警察が来ないか目を光らせている。

「三島サンの知り合いのワタルっていいいます。通ってもいいですか？」

おそらく三島にすでに話は聞かされているのだろう。ヤクザは何も言わずに小さく頷いて、目の前の扉を開いた。

まだ夜の七時だったが、怪しいライトで照らされた店の中には五十人ほどの客がいた。皆おれには買えそうもないような高級ブランドのスーツやドレスを着こなし、各々サイコロを振って歓声をあげたり、カードをめくって落胆の声をあげたりしている。そんな中でジーンズ姿のおれたちはひどく目立っていたが、おれは大して気にはしなかった。カズヤはきよろきよろと辺りを見回しながら、バツが悪そうに、「おれたちって場違いじゃないか？」と何度も呟いている。

「よお、ワタル、来たな。そっちが客か？」

三島は二十七歳のわりにはかなり大人びた顔立ちをしている。まあハッキリ言えば老けているわけだが……。うっすらと残っている髭がその渋い顔によく似合った。三十五だと言われてもだれも疑問

は抱かないはずだ。この人とも、いろいろなことがあって知り合い、よく世話になってる。会う度に組に勧誘されるのは面倒くさいが。

「どうも三島さん、お久しぶりです。こっちはカズヤさんっていつて、おれがお世話になってる人なんですよ。遊んでいってもいいですか？」

「もちろん。好きなだけ遊んでいけよ。カズヤ君、だっけ？ おれはちょっとコイツと話があるから、適当に遊んでくれ。案内は部下のやつに頼むからさ」

そういうと三島は一人の男を呼び、カズヤを案内させ始めた。おれは三島に連れられ、カジノの中にあるバーで横に座った。

「最近調子はどうだ？」

三島はタバコに火をつけると、口を開いた。

「良かったときなんてあんまりないですよ。三島さんのところは？」

三島は注文したウィスキーを口に傾ける。

「最近はどこも金がないみたいでな。政党は変わるし、おれらだってイロイロ大変なんだよ。肩入れしてた政治家もスキャンダルでだめになったりな……。最近はぼったりだよ。……。それより、あのガキはなんだ？ みたところお前のホントのツレじゃねえんだろ？ むしろお前が嫌いそうなタイプにみえるけどな」

三島には人を見る目が備わっている。上に立つ者としてはなくてはならない能力だ。

「ええ、今の依頼に関係してくる人です。そのために近づこうとしているんで、今日はなんとか気分よく帰らしてやって欲しいんですが……。できますかね？」

三島はにっこりと笑うと、深くうなずいた。

その日の帰り際、カズヤは終始笑顔だった。聞いたところによると、五十万円分勝ったらしい。上機嫌で鼻唄まで歌っているほどだ。どうやら三島が「ナニカ」してくれたらしい。二人で明るい街中をゆっくりと歩いているとき、不意にカズヤは口を開いた。

「なあワタル、今日うちに遊びにこいよ。この前の約束、果たしてやるからさ」

チャンスが、きた。だがなぜか、言いようのないほどに胸の中が熱く、苦しくなっていた。

カズヤの部屋は、なかなかのモノだった。駅に近いマンションの一室、ドアを開けて中に入ると、左手にトイレと風呂がセパレートであり、奥には部屋が三つある。都心でこのような部屋なのだから、三十万はくだらないようなところのはずだ。まずおれたちは左の部屋に入っていた。そこはキッチンのあるリビングだった。テレビもかなり大きく、ソファもかなりふかふかで、金のかかった部屋に違いなかった。カーテンを開けてベランダに出てみると、宝石のように光り輝いている町並みが眼下に広がる。思わず吐息を漏らしてしまうような、見事な景色だった。

カズヤはリモコンでエアコンをつけると、冷蔵庫からつまみを取り出してきて、ソファに並べた。

「この部屋すごいですね」

おれはキョロキョロと部屋を見渡し、感心したようにいった。それは本心からだった。特に、この景色が羨ましい。

「まあ、な。三十五万くらいかな、確か……。もちろん、親は頼ってないしね」

カズヤは缶ビールを開けると、ぐいっと喉の奥にすべらしていく。おれの記憶が間違いでなければ、コイツは高校生だったはずだが……。その飲み方をみれば、飲み慣れていることがわかる。

「まあとりあえず飲みますか。今日の大勝ちを肴にでも」

おれも喉を鳴らしてビールを飲み始めた。

三時間ほど飲んだ後、カズヤは顔が真っ赤になっていた。少しだけ呂律もまわらなくなっており、いつもは言わないような下ネタもポンポンと口から飛び出すようになってきている。おれは飲んでるとみせかけていただけだったから、まだまだ余裕だった。もつとも、普通に飲んだとしてもまあまあ強い方だから、問題はなかったと思うが、それでも、少しでも頭の働きの鈍ってしまうのが嫌だった。

「そろそろ教えてくださいよ、カズヤさん。どうやってこんな部屋を借りれているのかを」

カズヤは含みをもたせた笑いを浮かべると、深くうなずいた。

「まあ、そろそろいいかな。ワタルのおかげで、今日は儲かったし、言つとくが、この秘密を教えるのは、お前が初めてだぞ？」

「なんかコウエイですね」

おれの言葉に笑顔で答えると、カズヤはソファから腰を上げた。そしてついて来いとおれに手で合図する。

カズヤが向かったのは、玄関から向かって右側の部屋だった。ドアをゆっくり開けると、中は暗闇だった。カズヤがニイっとおれに笑顔をみせてから、電灯のスイッチをいれた。

とたん、パツと目の前に広がった光景で、おれは今回の事件がすべてみえたような気がした。

部屋の広さは十畳ほどだろうか、左奥には少し大きめのベッドがあり、それを取り囲むように三台のビデオカメラが設置してあった。いずれも、ベッドに向けられている。右奥にはDVDプレーヤーと大きなテレビ、そして最新のノートパソコンが設置してある。傍らにはDVDが山のように積まれてあった。あきらかに、“何か”を撮影し、そしてそれを編集するための設備だった。それが何を撮影しているのか、それはもはや、おれには考える必要もないように思われた。

「すごい設備だろ？ 簡単なことさ。ここで女とヤツて、それをビデオにおさめる。あとは高校生とかが好きなマニアの奴らに売っぱらっちゃえば、元のDVD代の数百円だけで、ほとんど儲かっていくわけだ。シンプルで、なおかつ利益が大きい。売る相手は完全会員制にしてるし、サイトも見た目は普通にしてあるから問題ないしな。こんなDVD一枚に何万も出す奴らが、この国には大勢いるんだよ。馬鹿だよな」

そういつてカズヤは得意げな表情を浮かべる。まるで自慢をする子供のように、自分の行いが正しいことであると言わんばかりの、

一寸の曇りもない笑顔。

おれは胸の奥から熱いものが盛り上がってくるのを感じていた。とても抑えきれそうにない、深く、そしてどす黒い怒りのみが、体中を埋め尽くしていく感覚がある。この場でコイツを殴り倒してやったら、どれほど心の中がスカッとするだろうか。震える身体を抑えて、おれは平静を装った。まだだ。完全な証拠を手に入れるまで、それはおさえておかなければならない。直人の顔を思い出し、何度も何度も自分に言い聞かせた。

「たしかに、スゴいですね。最近撮ったものってどういふのがあるんです？」

カズヤは一枚のDVDをケースから取り出して、DVDプレーヤーにセットした。テレビがパツと明るくなった。

「二週間前ぐらいかな。コイツが一番最新だ。名前は……なんて言ったっけ、忘れちゃったけど、けっこう可愛い子だったな……。まだ面倒くさくてダビングしてないから、これ一枚分しかデータがないんだ」

テレビに映ったのは、二人の男女だった。女は全裸で、その手には手錠がかけられており、それはベッドに結ばれていて、逃げられないようになっていいる。さらに声も出せないようボールギャグをつけられている。そしてその女に馬乗りになっているのは、今おれの隣にいる男、まぎれもなくカズヤだった。おそらく慣れていて、そして計算しつくされているのだろう。カズヤはカメラの中央で映り続けている。女の顔には激しい抵抗の色が浮かんでいたが、カズヤの執拗な行為に、その顔にもだんだんとあきらめの表情が表れていた。

そのレイプ映像は三十分以上にも及んだ。おれは吐き気を覚えるようなその映像をただただ見続けていた。その横で、カズヤがニヤニヤしながらおれの顔を覗き込んでいるのが気配でわかる。

女の顔ははっきりと映っていた。涙でぐしゃぐしゃになっているその顔には、おれが直人から受け取った写真の中で微笑んでいる、

美和の面影が微かに残っている。

それは、あまりにもむごすぎる光景だった。身動きできない娘を、男が嬉しそうに犯し続ける。何度も、何度も。

おれの中で決意は固まった。コイツに同情の余地はない。人の痛みというものが、根本的に分かっていないのだ。だからこのようなことが平気できる。正義だの悪だの、そんな言葉を使うつもりはない。しかし、コイツは、何よりも許せない。

「他に何人分くらいあるんですか」

少し震えた声で、おれがそういうと、カズヤは指折り数え始めた。「忘れたけど、けっこうあるな。何本か貸してやろうか？」

「じゃあこの映ってるやつ、貸してもらえませんか？ 気に入っちゃったんで、お願いしますよ」

カズヤは酔っているせいか、快諾してくれた。もちろん、すぐに返せよ、とは言ってきたが。

そしてその後、おれは用があるといって、カズヤの部屋をあとにした。カジノに行く約束をとりつけてから。

イライラしているせいか、おれは足早にその場を離れた。さっき借りたDVDのケースを、ポケットの中で何度も確認する。それと同時に、自分の心を幾度となく確認する。

おれは外に出て携帯を抜くと、三島に電話をかける。

「三島さん、ワタルです。ちょっとお願いがあるんですけど……」
「今日二度目のお願いだな。どうした？」

おれはごくりと唾を飲み込むと、呟くように懇願した。三島に迷惑がかかるかもしれない思いながら。

「ハメてやりたい奴がいます。徹底的に」

おれは自分でも背筋が冷たくなるほど冷静にそういった。

「今日連れてきた奴か？」

三島はほとんど状況を理解してくれたようだ。声を潜めたのがわかる。

「はい。またカジノに連れて行くんで、その時にお願いします。今

から計画を話したいんで、店に行きます」

「おう、待ってる。できる限り協力はしてやるよ。一つ貸しだけだな」

そういつて三島は低く笑い、電話を切った。

次におれは直人の方に電話をかける。

「直人さん？　ワタルだけど、今度、来て欲しいところがあるんだけど。会社休める？」

「分かったのか！」

直人は興奮したように大きな声を出した。

「ああ。今度会ったときにすべて話すよ。これだけは言っておく。娘さんは、自殺に追い込まれたんだ」

「そうか……、そうか……！　誰だ、そいつは……！」

また電話する、といっておれは電話を切った。直人はおれの番号が分からないから、おれに電話をかけてくることはなかった。

そして、おれは計画を胸に秘め、三島の元へと向かった。

人間は驚くほど残酷になれる生き物だ。ライオンのような肉食動物でさえ、腹が満たされれば目の前に獲物が通っても襲うようなことはしないという。だが人間は違う。生きるためでも何でもなく、簡単に他の生き物を殺してしまう。自分の命はともかく、他の者に対する命の尊さを知らないものが多い。イジメや、あるいは強姦によって自ら命を断ってしまう者もいるように、自分という存在が軽んじられているのを感じると、ヒトはこの上なく脆い存在になってしまうのだと、おれは思う。

ある条件の下、人間は冷酷になれるのだ。集団の中にいたり、目的を持っている場合などあると思うが、おれはどれに当てはまるのだろうか。

最近は鏡をみていない。ガラスなどに自分の姿が映るのも嫌だった。きつと……、きつと自分が恐ろしい顔をしていると思ったからだ。

その時は、一週間後にやってきた。すでにアリ地獄の中にいることに、カズヤは気づいていなかった。毎日毎日、どれほど負けようが性懲りもなく三島の店に通い詰め、湯水のように金を使っていくカズマは、おれからすれば、みていて滑稽でもあった。素人で、心底ギャンブルが好きな奴でもあり、そしてカズヤはただそのスリルを楽しむだけではなく、勝ちにこだわすぎるために、小さな勝ちと大きな負けを繰り返し、底のみえない落とし穴に完全にハマっていた。もちろんそこにはタネがある。一流のディーラーは、カードを自由に操ることができる。おれが三島に頼んだことだった。もともとギャンブルなんて、店側が儲かるようになってるのに、まだまだ勝負を繰り返すつもりだった。

カズヤは一週間もすると貯めていた汚い金を使い込んでしまったようで、おれに金を貸せと言ってきた。そのとき、すでにカズマは

正気を失ったような目つきをしていた。もちろん、待ってましたとばかりに、おれはすでに作成していた借用書にサインをさせ、三百万円分のチップを渡してやった。おれは自分でも驚くほど冷静にカズヤをどん底へとたたき落としていった。自分でも、腹の奥が冷え込むような想いだった。

運命の日、いつもより早めの閉店時間が過ぎ、店の中に客はまったくいなくなった。しかしおれはカズヤに残るように言った。閉店時間の後に、常連客だけの催しがあるからと嘘を言って。カズヤはいつものように嬉しそうに笑うと、何が始まるのだろうと胸をおどらせている。

「おい、そろそろ教えてくれよ。何があるんだ？」

カズヤはこれから自分の身にどのようなことが起こるのかも知らずに、のんきに顔をほころばせている。

おれはゆっくりとカズヤの方を振り返ると、奴の頬を思い切り殴りつけた。右のコブシに鈍い痛みが伝わる。誰かを殴りつけたのは、久しぶりだった。

カズヤは目を見開きながらその場に倒れ込んだ。

「テメエ、ワタル！ 何すんだよ！」

カズヤが立ち上がる前に、屈強な三島の部下三人が、あつという間にカズヤをロープで手と足を縛り上げてしまった。さらに目には、目隠し用の厚めの布をまいた。

「お、おい！ これはなんだよ！ 俺にこんなこととしてタダで済むと思うなよ！ 俺の親父は……！」

そこまで言ったところで、三島がカズヤの頬を張り、腹を爪先で蹴り上げた。カズヤは苦悶の表情を浮かべながら床につつぶし、むせ上げている。しかし三島の部下たちはつぶすことも許さず、すぐにカズヤの身体をぐいと乱暴に引き上げた。

「おい、ボウズ、しゃべるんじゃねえよ。殺すぞ……」

三島は低く、うなるようにそう言った。こういった言い方は非常に有効だ。変に感情を込めて言い放つより、ずっと相手の心に恐怖

を刻み付ける。それにカズヤは今、目隠しをされた状態だ。相手の声が脳の奥まで響き渡っているはずだ。カズヤはヒツ、と短く声を出した後、何もしゃべらずに小刻みに震え始めた。

「お前に質問をする。正直に答えろ……。答えれば殺すことはしない……」

強烈なムチの後のアメだった。少なくともカズヤにはそう聞こえたはずだ。三島がそう言った後、おれの背後から直人が姿を現した。とはいっても、その姿をカズヤが視認できるわけではないが。

「お前が、三週間前にレイプした、女の子の、名前を、言ってみろ……」

直人はできるだけ冷静に振る舞っているようだった。唇が小さく震えている。おれはすでにほぼすべてを話していた。

「答えろといっているんだ！」

恐怖のためか、なかなか答えようとしないうちに、直人は苛立ったようだった。細い首を唸らしながら、吠えるようにそう言った。その胸中は、おれでも少しは察することができた。娘の仇が目の前にいるのだ。冷静にいられるわけがない。

「……たしか……美和……という名前でした……」

その言葉が出た瞬間、直人は懷から突然包丁を取り出すと、カズヤに向かって走り出そうとした。間一髪、おれがその間に入り、直人の腕をねじ上げると、包丁を下に落とさせ、それを蹴った。落ちた瞬間、包丁はカーペットに浅く突き刺さった。直人もおれも、無我夢中だった。

「やめろ、直人さん！ 約束しただろう！ コイツのカタはおれがつける……！」

弾けるように叫んだおれの声を、直人の落雷がかき消した。

「とめるな！ コイツは……、コイツはおれの娘をレイプし、死に追いやったんだぞ！ なぜ私がこの手でコイツを殺せないんだ！ ワタルさん、コイツを、私の手で殺させてくれ！ 刑務所でもなんでもいく覚悟はできている！」

直人はおれのロックをはずすと向き合い、鬼気迫る表情でそう叫んだ。

「ダメだ！ 殺しちゃいけない！」

「なぜだ？ コイツはクズだ！ 悪魔だ！ なぜ殺してはいけない？ こいつは、私の娘を奪ったというのに……！ 殺すのがなぜいけない！ 君も陳腐な映画のように、美和がそれを望んでない、とでも言うつもりか！ 娘は死んだ……もう、どこにもいない！」

部屋中に直人の荒い息が響き渡る。直人は目の端に涙を浮かべていた。それをみておれも鼻の奥に熱いものが上ってくるのを感じていた。みな押し黙り、直人の悲痛な訴えに胸を打たれていた。三島も表情を曇らせている。おれも、少し気持ちがブレかけていた。直人のそのむき出し感情は、親として、いや人として自然なものだ。だけど……。

「おれが……、それを望んでいないからだ……。あなたを殺人者などにしたくはない。娘さん……美和さんは亡くなったけど、あなたはまだ、生きている……」

できるだけ丁寧な言葉を使ったつもりだった。直人の表情が少しだけ緩くなる。しかしまだ眼は血走ったままだった。

「直人さん、あなたは『生きて』くれ。おれからの、頼みです……」
そういつて、おれはゆっくり、深々と頭を下げた。

直人の膝は突然崩れ、その場にうずくまった。そして頭を抱え込み、大声で泣き始めた。

その場にいただれも、言葉を発さずに、直人の泣き声を受け止めていた。

おれは酷いことをしたのかもしれない。仇を目の前に、手を出すことを禁じたのだ。そのつらさが分かるなど、おれには決して言えない。決して。

「……話は聞いていたな？ カズヤ、とかいったか、お前は俺のこの組が処理する」

長い沈黙の後、最初に口を開いたのは三島だった。冷たく、あま

り抑揚をつけずに言葉を発する。

「こ、殺さないでください……」

懇願するようにカズヤは小さな声を出した。

「殺しはしねえよ。お前にはたっぷり借金分働いてもらわねえとな。利子つけて五百万、きっちり稼いでもらう……。おい、つれていけ」
三島からのその言葉を聞くと部下の男たちは素早くカズヤを立ち上げらせ、引きずるようにしてカジノの奥の部屋へと連れて行った。必死に抵抗するカズヤの叫び声が、まだ泣き続ける直人の声と虚しく重なり合った。

「どうするつもりなんです？」

おれは三島に向かって尋ねた。三島は軽く口をゆがめた。

「知り合いにマニアックな奴らがいてな。そいつに引き渡す。まあ、なかなか悪くない顔だから、相手の男優も喜ぶだろうさ。アイツには丁度いい罰だろう……。？ ……じゃあ後始末は、手筈通りに頼むぜ」

おれは礼を言うと、直人の傍らに歩いて行った。直人は泣き止んでいたが、宙に視線を浮かべたまま呆然としている。

「さあ直人さん、帰ろう……。もう、終わったよ……」

おれは直人を抱えるように肩に腕をまわすと、立ち上がらせた。そしてそのまま支えながら、外へと向かって歩き出した。

直人は力なく、人形のように脚を動かし続けるだけだった。無表情で、ただ黙々と歩き続けるその様子からは、生気がまったく感じられない。

少しずつ年始のカウントダウンまで近づいていき、街はどこか浮かれているが、おれたちは対照的だった。一言も発さずただただ、家へと向かう。

やっと直人の家までたどり着いたときには、もうヘトヘトだった。身体も、心も、疲れきっていた。

直人は門をくぐってから、初めておれに目線を合わせた。

「ワタルさん、ありがとう……。君に依頼して、良かった。ありが

とう。ありがとう……」

ほんの少しだけ、直人は力なく微笑んだ。

「いや、その言葉は口にしまつていてよ。今度聞くからさ」

おれはそういうと踵かかひを返した。それを慌てたように直人が引き止める。

「明日の朝、あの公園に来てくれないか？　話したいことがあるんだ」

おれは直人に顔を向けて深く頷くと、背を向けて歩き始めた。

「じゃあ、また明日……」

次に日の早朝から、おれはコーヒーを飲みながら公園のベンチに座っていた。いつもよりも苦く感じるのは、おれの中に何かまだ消化しきれていないものがあつたからかもしれない。ゆっくりと明るくなつていく公園の中を見つめるおれの頭の中を、蛇のようなものがうごめいていた。柔らかい朝日が少しずつ顔に当たってきて、本当に心地よかった。久しぶりに、心が安らいだ気がする。

「すまない、待たせたね……」

気がつくと、直人が目の前に立っていて、おれと目が合うと、ベンチの横に座った。昨日よりも、何か憑き物がおちたような顔つきをしている。

「いや、いいよ。それで、話したいことって？」

おれがそういうと、直人は鞆から茶色の封筒を取り出した、けっこうな厚みがある。

「いや、ああ言わないと君は来てくれないんじゃないかと思ってね。これは、正当な報酬だ。受け取ってくれ」

そういうと直人はその封筒を差し出した。おれは眉を寄せ上げる。「今回、おれは大したことはしちやいないよ。そんなものを貰う資格なんてない……」

直人は首を横に振った。

「君は、私を救ってくれたじゃないか。しかもこの金は、美和のた

めに貯めていた金だ。君なら、うまく使ってくれるだろう。いらなければ、捨ててもらってもかまわない。受け取ってもらえるまで、私はここを動かないよ」

直人はふつと顔の表情を緩めた。その表情に負けてしまい、おれはその封筒を受け取った。ずしりと重い。札束の重さだけではない。身体全体が沈み込むような、不思議な重さがあった。

「ありがとう……」

おれたちは二人同時にそういった。目が合い、くすつと笑う。

「さてと、そろそろ行くよ。携帯が見つかったんで、今から交番にとりに行くんだ。また会おう」

直人は立ち上がり、手を挙げておれから離れて行った。

心の傷を癒すのは結局のところどんな言葉でもなく、時間だ。まだ直人が立ち直ったとは思えない。だが少しずつだ。少しずつ、彼は背筋を伸ばしていくはずだ。そんな風におれは考えていた。

次の日、直人は自宅で首を吊って自殺した。寸前に救急車を呼んだため、すぐにその体は発見された。直人の妻は、あの事件から精神を病んでしまったらしく、おれと最後に会った日の夕方に亡くなっただけらしい。

知り合いから聞いた話では、直人の傍らには携帯電話が落ちていたということだ。そのメール画面にはこう映し出されていたらしい。

『From 美和 sb..(non title) 本文…助けて』

直人は復讐を遂げたのだろう。

おれは例のDVDを握りしめ、四つ折りにすると、近くを流れる川に向かって放り投げた。

ちゃぽつ、と短く音がして、少しだけ川に波紋を伝わせていったが、やがて何もなかったかのように、川はいつものように流れはじめた。

今夜はレクイエムを聴くのがふさわしい。あの一家のために。

電車を待っている間に、駅のホームでおれは新聞を読んでいた。一面トップは警視總監についてだ。

『警察のトップ、我が子の罪をもみ消す！ 黒い疑惑が警視庁を覆う！』

あれから三島とおれの手回しによって、カズヤと、その親父の罪は日本中にバラまかれた。その結果あいつの親父は警視總監をやめさせられただけじゃなく、逮捕された。おそらく刑務所送りになるはずだ。裁判員の判断は簡単に想像できる。ここ数日間ワイドショーはその話題でもちきりだ。

おれは小さい頃から育った施設へと足を向けていた。

直人から貰った金は五百万。おれのポケットにはでかすぎる。だからそのすべてを施設に渡すことにした。

ボロボロの門をくぐると、数人の子供が庭で走り回っていた。

おれに気がつくと、不思議そうな顔をして寄って来る。

「お兄ちゃん、何の用？」

小学校の一年生ぐらいだろうか、小さな少年だった。少し表情を曇らせている。

「ああ、おれワタルっていうんだけど、母さん……いや、優子さん、いるかな？ お友達でね。会いにきたんだ」

男の子は頷くと家の中へと走っていった。おれは庭の中にあるブランコの方に歩いて行くと、座ってこぎ始めた。木のシートはささくれ立っていて、おれがガキの頃からある、骨董品のブランコだ。すべり台も塗装が剥げ、どこもかしこもぼろぼろだ。みていると、懐かしさがこみ上げてくる。アニキと二人、よく遊んだものだ。

しばらくすると、痩せた中年の女性が慌てて家から飛び出してきた。この施設の責任者である柴田優子、施設の人は皆、母さんと呼

んでいる。みる度に小さくなったように感じられるのは、おれが大人になってきた証拠なのだろうか。

「ワタル、いつもいつも言ってるでしょ！ 帰ってくる前にはちゃんと連絡しなさいって！」

開口一番こうだ。この人には一生頭が上がりません。

「ごめんごめん。でも、ここには急に来なくなるんだよね。母さん、元氣そうだね」

そういつて、おれたちはかたく抱き合った。昔から好きだった、優子の柔らかな匂いが鼻の奥を刺激し、急激に昔のことが思い出される。少し涙が出そうになった。

「さあ、中に入って。久しぶりなんだから、ゆっくり話しましょう」
優子は手招きして、おれを家の中に入るように言ったが、おれは首を縦には振らなかった。

「いや、今日はいいいよ。これを渡しに来ただけだから」

そういつておれは紙袋を差し出した。中には洋菓子と、茶色の封筒。優子はとりあえず受け取って、中身を確認したあと、目を丸くさせた。

「またこんな大金を……！ あなたの仕事は知ってるつもりだけれど、このお金は受け取れない。自分のために使いなさい」

きっぱりと断ると、優子はまっすぐおれの目を見つめた。

「おれが金に困っているように見える？ それに、この施設のために金を使うことが『自分のため』なんだ。これを、子供たちのために使ってください。お願いします……」

おれは深々と頭を下げた。その姿に優子は何も言えなくなってしまったようで、それきり黙り込んでしまった。そして涙がこぼれ落ちた目元をぬぐった。

「あなたは……あなたは本当に優しい子に育ったのね。私はワタル、あなたを心から誇りに思う……。ありがとう。このお金は、子供たちのために使わせていただきます……。ありがとう……」

優子も深々と頭を下げた。昔に比べれば、随分と背が丸まったよ

うだ。

「母さん、母親が息子にそんなに頭を下げるもんじゃないでしょ。また寄るから、おいしいお茶でもごちそうしてよ」

おれはにっこりと、心からの笑顔を浮かべると、優子に背を向けた。そして数歩進んだところで、振り返った。

「そうだ、お金の代わり、といったら何なんだけど、お願いがあるんだ……。きいてくれる？」

なんでも、と優子は目で促した。

「何があっても、ここの子供たちの、味方でいて欲しい。何があるうと、何年経っても……」

「ええ、誓うわ……」

もちろん、というように優子は頷き、微笑んだ。

「ありがとう。じゃあ、またね」

そういつて、おれは施設をあとにした。優子のお礼の言葉を、背中

に受けながら、彼女のその言葉が、おれには何よりも嬉しかった。

あの人なら、何があっても子供たちに自殺なんてさせない。おれはそう、信じている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4318q/>

レクイエム・フォー・ア・ガール

2011年7月24日17時56分発行